タイトル：大島青松園の友
名前：松内　喜代子

（本文）

瀬戸内海の小さな島。四国の高松から船で渡る。その島に大島青松園がある。元ハンセン病の人達が住んでおられる。

私が初めて、青松園を訪ねたのは、平成六年。もう三十年以上も前のことだ。それ以降、毎年一回は島に行き十六年間の交流があった。初め一緒に行き、その後もよく行ってくれた夫が亡くなり、今私は八十二歳。遠くへの電車の旅はしんどくなり、島に住んでおられた短歌の三人の友も遠い日に亡くなられて今は訪ねていない。大島青松園の建物と、海辺の松林、人のやさしさは大切な思い出だ。

私は若い頃から短歌の結社「関西アララギ」の会員で、毎月歌を送って歌誌に作品を載せてもらっていた。大島に住む三人の友を作品で知り、互いの批評などを言い合って文通して親しくなった。

萩原さん、林さん、松浦さんの三人は十代の頃にハンセン病になり、強制隔離された島で五十年以上生活された。元ハンセン病の名が示すように、どの人も完治されているのだがライ予防法が廃止されたあともずっと島に住まれた。ハンセン病は伝染すると、世の中の偏見は残っていた。不自由な身体で、隔離の島の生活をしながら短歌を作る喜びを知り勉強して、私たちよりずっと歌の先輩である。孤島での生活で短歌を学び励みとされた長い年月である。

言葉は悪いけれど、私の興味本位の考えでもっとその人達の生活を知りたい、会って話を聞きたいと島へ行こうと思った。

大島に着いて桟橋を降り、白い砂の浜辺に多くの人の出迎えを受けた。三人の友と事務所の人や看護の人もいた。「えらい所へ来てしまった。何て言えばいいのだろう。」私は友のハンセン病の後遺症の顔や身体を見て困った。傍の夫を見ると、いつもと変わらずやさしい物腰で「こんにちは。大阪から来た松内です。初めまして。」と淡々と言う。夫が一緒に来てくれて良かったと思いつつ私の不誠実さを反省した。

萩原さんはハンセン病による失明で全盲である。林さんは髪はなく、かつら（ウィッグ）ですよと見せてくれた。二人は夫婦でお互い支えあってきた。松浦さんは手の指の関節が残って、そこにペンを挟み紐でくくって文字を書く。盲目の人達の代筆を続けて、少しでも誰かの手伝いをしたい気持ちが大きい。私にくださった手紙には細かくきっちりした字が並んでいる。

萩原さんが、夫を喜んでくださった一つ。目が見えなくて話をして、松内さんの声はまっすぐに自分に届く。今まで目が見えないからと顔を見ず、よそを見て話す人を感じてきたので、松内さんが誠実に私の顔に向かって、大きな声で話されているのがよくわかる。と言われた。耳は二人ともよく聞こえるので、私が弾く琴のテープ「ふるさと」や「赤とんぼ」な

どの童謡の曲を送った。故郷を遠く離れた二人に喜ばれた。

松浦さんを関西アララギ六百号の記念会にお誘いして大阪への一泊旅行を計画した。来てもらったら何とかなる。私の楽観的考えで、四国に住んでおられる短歌の友、高橋さんが付き添ってくださった。新大阪へは私が電車で送迎した。

上六の「アウィーナ」会館で百名を超える会員の前で、松浦さんの優秀作品の発表があり恩師の高木先生から表彰された。指のない両手でしっかり賞状を受け、片足は義足だけど力強く歩かれた。晴れやかな姿に拍手をした。

会場となったホテルで一泊してもらった。応援に来てくれた夫と、もう一人尼崎の短歌の親しい友、池田さんを交え、修学旅行みたいだねと雑談を楽しんだ。部屋に戻って寝る時に、松浦さんは自分の部屋のドアを開けたままにされた。夜中に何かあった時、自分でドアのノブを回して開けられないのだ。防犯より身の安全だった。そんな事も私は知らなかった。翌日は大阪城を案内して観光した。障害の人といる時、何でも手伝うのでなくその人がして欲しいこと、不自由で困っている時に手伝うことを学んだ。相手を思う心のあたたかさが大切だ。ひとときの慰めでなく、長く続けるやさしさも。

コーヒーフレッシュのふたを開ける。階段を降りる時が、義足に堪えるので、腕を組んで歩く。松浦さんを手伝ったのはそれだけだ。

大阪から大島まで七時間余りかかる、いつも時間を気にしての短い時間の語らいであった。忙しくて時間がない時は、松浦さんが高松まで来てくださった。短歌の友が八名集まり、全日空ホテルで松浦さんと食事をしたことも楽しい思い出だ。亡くなられるまでの十六年間、年に一回だけど、私の気まぐれも、約束だけは、きっちり守って続いたことが嬉しい。

療園の友を励ますつもりの私が、色々と励ましてもらっていたのだと懐かしく思う。

短歌「大島青松園の友」

病いに耐え故郷を恋い嘆きたる浜辺の青き藻今に靡けり
それぞれに障害ある身で耕やせる島の畑の大き南瓜
ひとときの会いに満たさるる思いありや帰りの船の窓しぶきする
階段を降りる不自由を言う友とわがおのずから腕組みてゆく
介護され島に老いゆく盲の友大阪の街をこまごまと聞く
障害のある人と素直に語り合う心を松浦さんに学びぬ
忙しきわれの暮らしに療園の友を訪ねる約束忘れず
瀬戸の島に病養う友に送る明るき青のマフラーを編む
分かれゆく船に乗る時涙ため送りくれたる松浦さん夫婦
麦の穂の並びて立つる絵はがきを春待つ島の友に送りぬ